



昨年度の受賞者

平成27年11月27日（金）

愛知県農林水産部農林政策課企画グループ
担当 福井、江本 内線 3658、3624
電話 052-954-6395（ダイヤルイン）
公益財団法人 愛知県農業振興基金
担当 土方、鈴木
電話 052-951-3626

本県の農業・農村の振興や発展に尽力した方を表彰します ～平成27年度愛知農業賞（あいちアグリアワード）表彰式～

公益財団法人愛知県農業振興基金では、本県の農業・農村の振興や発展に尽くした個人や団体を表彰する農業振興功労者表彰事業（表彰名：愛知農業賞（あいちアグリアワード）※¹）を平成18年度から実施しております。

この事業は、愛知県が50年余にわたって表彰を続けてきた「山崎賞」「岩槻賞」という権威ある農業賞を継承し、両賞の理念を引き継いだものです。

この度、下記のとおり平成27年度愛知農業賞（あいちアグリアワード）の受賞者が決定し、表彰式を開催しますのでお知らせします。

記

1 平成27年度愛知農業賞（あいちアグリアワード）受賞者※²

（1）担い手育成部門

坂本 俊光 様（さかもと としみつ）（幸田町 77歳）

露地ナス栽培において、優良苗生産・供給を行うとともに、県農業大学のボランティア研修講師として技術指導を行い、担い手の育成に尽力している。また、坂本氏から直接ほ場において技術指導を仰ぐ栽培者は、県内各地で約50名にものぼり、各地域の農業の発展にも大きく貢献している。

（2）技術改善部門

富田 孝 様（とみた たかし）（豊橋市 57歳）

モモを中心としたモモ・カキ・クリの大規模複合経営を行う富田氏は、開心型樹形での管理や、土壌診断の徹底による施肥により、品質・収量の安定化、低コスト化を実現するとともに、農薬に頼らない防除対策と低樹高仕立てを実施し、地域への普及を図っている。また、集出荷場の選果機導入に尽力し、労働時間の低減と市場評価の向上にも貢献している。

（3）農業・農村振興部門

木曾川町玉葱採種組合 様（きそがわちょうたまねぎさいしゅくみあい）
（一宮市 設立45年）

全国的にも珍しいビニル被覆栽培により良質なたまねぎ種子を生産し、45年の長きにわたり全国に供給している。一時、高齢化等による解散の危機に直面したものの、地元農業塾の研修生や定年退職後のUターン就農で復活し、現在は極早生品種の全国シェア約3割を占めている。さらに、地元和菓子店と連携してたまねぎを生地に練り込んだどら焼きを商品化するなど、地域の農業振興に大きく貢献している。

2 表彰式

(1) 日 時

平成27年12月14日（月）午後2時

(2) 場 所

J Aあいちビル14階 大会議室

（名古屋市中区錦三丁目3-8）

(3) 主 催

公益財団法人愛知県農業振興基金

(4) 内 容

表彰状、副賞の授与式

受賞記念講演（受賞者1名につき20分程度）

※1 愛知農業賞（あいちアグリアワード）の概要については別紙1を参照

※2 受賞者の詳細な経歴、受賞理由については別紙2を参照

愛知農業賞（あいちアグリアワード）について

1 目的

本県の農業・農村の振興に尽力し、その功績が特に顕著で他の模範となる者を表彰することにより、後に続くものが、自信と誇りを持ってその振興に取り組むことを助長し、もって農業・農村の継続的な発展に資することを目的とする。

2 表彰制度創設の経緯

愛知県には50年余にわたって表彰を続けてきた「山崎賞」「岩槻賞」という権威ある農業賞があった。山崎賞は農業教育に貢献した教育者や農業者、優秀な農業に関する論文やプロジェクト成果を修めた学生に贈られていた。岩槻賞は農業技術の開発や改善、普及に貢献した技術者や農業者に贈られていた。

平成17年度に両賞を運営していた財団法人が各々解散した際、公益財団法人愛知県農業振興基金*が残余財産を継承し、両賞の理念を引き継いで「あいちアグリアワード」として平成18年度からスタートした。

なお、平成26年度から名称を「愛知農業賞（あいちアグリアワード）」に変更している。

※公益財団法人愛知県農業振興基金

優良種苗の供給、高度な営農技術の開発・普及、農産物のブランド確立、優秀な後継者の育成・確保などについて、農業者の創意工夫を活かした取り組みを促進し、愛知県の農業・農村の振興に寄与することを目的に、平成3年に愛知県と農業団体の出捐により設立された。

3 表彰の対象者等

表彰の対象者は、個人または団体とし、愛知県の農業・農村の振興に顕著な功績を挙げたものとする。

表彰部門は、担い手育成部門、技術改善部門、農業・農村振興部門の3つとする。

4 推薦・選考方法

推薦は推薦基準に基づき、県関係機関、市町村、農業協同組合等が行う。受賞者の選考は審査委員会で行い、理事長が決定する。

5 賞の内容

表彰状及び副賞30万円を贈呈する。

担い手育成部門



幸田町

さか もと とし みつ
坂 本 俊 光

坂本俊光氏は、昭和40年代に筆柿、露地ミカン栽培に加え、露地ナス栽培を開始し、現在、露地ナス30a、施設ナス18a、野菜苗25a（うちナス苗15a、本数：2万本）、筆柿80aの規模を、家族4名（坂本夫婦、長男夫婦）、臨時雇用4名の労働力で経営しています。ナス苗を除き、ほぼ全量を産直施設等で販売しています。

幸田町露地ナス部会を立ち上げ、部会長も歴任し、技術改良による地元での育苗及び苗供給の開始と品種変更に尽力され、組織強化と有利販売を実現させました。

平成18年の後継者就農時に経営移譲をしたことがきっかけで後継者育成に大きく目を向けるようになり、愛知県農業大学校での雇用セーフティネット対策訓練農業科（雇用創出農業研修）において、平成19年度から実習に使用するナス苗の納入が始まるとともに、実技指導をボランティアで引き受け、定植時、整枝誘引時、切戻し剪定時にはほ場へ出向き、作業ポイントなど実演を通して説明し、経済性を強く意識した実践的な栽培技術を受講者に分かり易く伝授しています。

坂本氏の指導の理念、信条は、

- ① 経済性を意識すること
- ② 植物・土を愛すること
- ③ 研修後も面倒をみること

であり、露地ナスは初期投資が少なく、収益性が高く、新規就農者が取り組み易い品目として、熱心に技術指導を実践しています。

坂本氏が持つ卓越した技術及び指導力と優良苗の供給に加え人柄の良さは、多くの門下生を生み、研修後、新規に露地ナス栽培を導入し、坂本氏の育成苗の使用と、直接ほ場において技術指導を仰ぐ栽培者は、県下の15市町に約50名（供給苗は、約1万本／年）となっています。

県下に広がる門下生は、各地元において安定した経営を実践し、各部会の中心的な役割と活躍を見せるようになり、新たな産地化も可能な状況にまでなっています。

このように、人と栽培の広がりや、まさに担い手育成ばかりでなく、地域の活性化へと発展しています。

技術改善部門



豊橋市

とみ た たかし
富 田 孝

富田孝氏は、昭和54年の就農時（経営移譲時）は、養豚、水稻、果樹（カキ・クリ）の複合経営（約200a）でしたが、現在は、モモ90a、カキ176a、クリ50aの計316aと地域屈指の大規模果樹経営者となっています。労働力は夫婦2名と摘蕾・収穫作業等の繁忙期のみ雇用するパート8名で、モモを中心とした果樹の複合経営をしています。

昭和56年に地元で品種登録された「勘助白桃」の安定生産と地域ブランド化に向けて、低樹高仕立てと徒長枝の秋期剪定による開心型樹形での管理及び土壌診断の徹底による施肥設計を部会に提案し、品質・収量の安定化を実現すると共に、肥料代の大幅削減を可能にしました。低樹高仕立ては、カキに平成10年、モモには平成14年に導入・普及させ、栽培管理の作業負担を軽減すると共に作業の安全性も向上させました。モモの低樹高仕立ては、現在、部会全体の約32%まで広がっています。

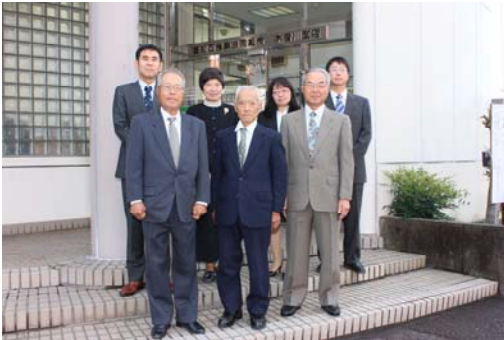
また、モモせん孔細菌病が平成21年ごろから深刻な問題となっていました。春型病斑「スプリングキャンカー」の切除徹底及び防風対策の開発・普及により、農薬だけに頼らないモモせん孔細菌防除（IPM）の効果を向上させました。

富田氏は、栽培講習会で自らの園地を率先して開放し、日々の実践により得られた知見や技術を積極的に伝授しています。防除のポイントや適期が栽培管理と関連して体系的に分かるよう、JAや県と協力し約10年をかけ地域オリジナルの防除・作業暦を作成し、地域全体で活用され、部会員の技術の向上を促進しています。

さらに、従来、荷造り作業で多くの時間を費やしていましたが、JAの集出荷場への光センサー付きの選果機導入について、柿部会・梨部会の役員と共に部会員一人一人に説得に回った結果、平成14年の導入、平成15年のモモへの使用が実現し、荷造り時間の大幅削減と糖度保証による市場や消費者からの評価向上が実現されました。

このように、研究熱心であるだけでなく、地域全体のレベルアップ、産地の振興にも寄与されています。

農業・農村振興部門



一宮市

きそがわちようたまねぎさいしゅくみあい
木曾川町玉葱採種組合

木曾川町玉葱採種組合様は、昭和45年の設立以来、45年の長きに亘り良質なたまねぎ種子を全国に安定供給しています。木曾川町は、冬期の降水・積雪が少なく、河川扇状地の砂地であるためたまねぎ栽培の適地となっています。他の採取地は、露天がほとんどであるのに対して、ここは、全国でも珍しいビニル被覆栽培に取り組み、品質の高い種子生産を継続しており、全国で生産されるたまねぎのうち、極早生品種種子の約3割という高いシェアを占めており、愛知県をはじめ全国のたまねぎ産地の発展に大きく貢献しています。

しかし、長きにわたる組合活動が、常に順風満帆であったわけではありません。

20名以上いた組合員も、平成に入ると海外種子に押され価格が低迷し、設立当初からの組合員の高齢化と合わせ減少傾向が顕著となり、平成15年ごろには8名となり栽培面積も縮小し、解散寸前に追い込まれました。

ちょうどそのころ、一宮市・稲沢市・愛知西農業協同組合が主催する担い手育成研修機関である「はつらつ農業塾」が活動を開始しており、そこで学んだ第一期卒業生の1名が、離農した組合員の施設・ほ場を借受けて新たにたまねぎ採種栽培を開始し、続いてUターン就農者1名も、採種栽培を開始しました。当初は、失敗も多い状況でしたが、ベテラン組合員のほ場まで至る熱心な指導・助言等の積極的な支援と、新規就農者の向上心が相まって、生産・経営が安定化し、さらに「はつらつ農業塾」卒業生が新規に加わり、現在、7名の組合員のうち5名が新規参入者となっています。まさに地域の担い手育成システムが機能し、ベテランと新規就農者が理想的に融合する中で、セイヨウミツバチを取り入れた自然に優しい栽培体系と定期的な相互のほ場巡回による技術の高位平準化、さらにたまねぎ産地との交流により実需ニーズを把握しての良質種子の安定供給を実現し、全国シェアを維持しています。

また、農商工連携の取組による和菓子「木曾川四季彩（カラフル）サンド」（たまねぎを生地に練りこんだどら焼き）を共同開発し、ギフト中心に年間100万円の売上がある定番商品として地域産物のPRに大きく貢献しています。組合員のほ場は、小学校の視察見学先となっており、農業理解活動の場としても大いに機能しています。